

2022年4月10日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 33 : 10～15、ルカによる福音書 22 : 31～34
「あなたのために祈った」

<信仰とは>

今日の御言葉は、「信仰」がどういうものか、ということ、わたしたちにとっても厳しく、そしてこれ以上ない慰めをもって語っています。

登場するのは、イエスさまの十二人の弟子たちの中でも、一番弟子と言われるペトロです。最初にイエスさまに選ばれ、招かれて弟子になった、ということは去ることながら。ペトロはやがて、キリスト教の教会を築いていく中で、最も中心的、指導的な役割を果たすようになります。ローマ・カトリック教会では、現在でも続くローマ教皇が「ペトロの後継者」とされていることから、どれだけ重要な人物かが分かります。

しかし、このペトロは、イエスさまの弟子として、とても立派で、勇敢で、強い信仰を持っている人物だった、という訳ではありません。通常、有名な人物や偉大な人物とされる人の伝記では、只者ではないエピソードや、どれだけ素晴らしい人物かということが並べ立てられます。ところが、聖書はペトロについて、その弱さ、情けなさ、罪深さを、実に驚くほど赤裸々に書き残しているのです。

それは恐らく、ペトロ自身がそのことを人々に語ってきたからに違いありません。そしてペトロが多くの人々に伝えたかったことは、自分が一番弟子である、自分の信仰がどうだ、ということではなくて。本当にどうしようもなく弱い、情けない、罪深い自分を、それでも赦して下さり、愛して下さり、救って下さった、神の御子イエスさまを伝えたかったからです。そして、そのことは、今のわたしたちに至るまで、とても大きな励まし、大きな慰めとして、伝えられているのです。

さて、今日から受難週に入ります。今週の金曜日には、イエスさまが十字架に架けられた受難日を覚えます。本日与えられた御言葉は、今のわたしたちの曜日で言えば、木曜日の夜のこと。日没から新しい一日が始まるユダヤ人においては、すでに夜になっている今日の箇所は、十字架に架けられる、まさにその日の出来事となります。

<最後の晩餐の席で>

さて、この場面は、イエスさまと十二人の弟子たちの最後の晩餐の席でのやり取りです。

イエスさまは、ご自分が十字架に架かれる前に、十二人の使徒と共に、過越の食事をすることを切に願われました。そして、イエスさまご自身がその食卓を用意され、使徒たちを席に着かせられたのです。

そこでイエスさまは、ご自分がこれから十字架に架けられて殺される、その意味をお語りになりました。

それは、すべての人を罪から解放するために、ご自分が生贄の小羊として献げられるということ。そうして、イエスさまご自身が流される血によって、神さまとすべての人間との間に、「新しい契約」を結んで下さる、ということでした。つまり、神さまが罪人であるわたしたちを救い、神さまと共に生きる者として下さる、そのご計画の実現のために、イエスさまはこれから死ななければならない、ということです。

そしてイエスさまは、その救いの御業が実現されたなら、イエスさまの十字架の意味を覚えるために、また神さまの救いの恵みを覚えるために、パンと杯を用いて「聖餐」を行なうようにと、お命じになりました。

そしてその最後には、十二人の中で、ご自分を裏切る者がいることを告げられたのです。

これを聞いた使徒たちは、イエスさまが語られたことの意味を、まだ十分に理解できていません。それで、イエスさまを裏切る不届き物は一体だれか。さらには、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうかと、議論を始める始末でした。

これに対してイエスさまは、ご自分がまさにそうなさったように、「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」と教えられたのです。

<サタンのふるい>

さて、この前回のところまで、イエスさまは十二人全員に対して語っておられました。

しかし、今日のところになって、イエスさまは、まさに一番弟子であるシモン・ペトロを名指しにして、こう言われたのです。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

まず、「サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた」とあります。サタンは、22章3節にも「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った」と語られていました。

サタンとは、わたしたち人間を神さまから引き離そうとする力のことです。ここではこのサタンが、「あなたがたを、小麦のようにふるいにかける」と言われています。

「小麦をふるいにかける」とは、収穫の時に、小石や色々余分のものが混じってしまった小麦をふるいにかけて、本来の小麦だけを残す作業のことです。つまりこれは、本物と偽物を仕分ける、本物か偽物かどうかを区別する、という意味があります。合格、不合格を決める、と言っても良いかも知れません。

そしてここでは「あなたがた」と言われています。これから十二人の使徒たちは一人残らず、イエスさまに従うその信仰が、本物か偽物が試される、ということになるのです。

わたしたちも、イエスさまを信じて生きるようになってからも、繰り返し「試練」と呼ばれるような出来事を経験し、信仰が試されることがあります。

その時に、自分がしがみついているものが、本物ではなく、偽物の信仰だったならば、信じる思いが揺らいだり、つまずいて倒れたりしてしまうことがあります。そしてサタンの力は、そのようなわたしたちに、自分は神さまを信じることなど出来ない。神さまの救いなどない。自分は救われないのだ。そう思い込ませて、神さまから引き離そうとするのです。

わたしたちは、どうして「サタン」などという存在があるのかと、疑問に思うかも知れません。でも実際それは、いるかないかという議論上のことではなく、わたしたちが罪に満ちた世界を生きていく中で、耐え難い苦しみや、悲しみ、またサタンの誘惑と呼ばれるものが、確かにあるということ。それによって、どうしようもなく神さまから遠ざかってしまう、神さまの恵みを、神さまの存在を疑ってしまう。ますます罪の深みにはまってしまう。そのような現実が、確かにあるということなのです。

しかし聖書は、そのようなわたしたちの悲惨な現実を見つめつつも、罪深い人間がまったく抗うことの出来ないこのサタンさえ、神さまのご支配の下にある、ということをはっきりと語っています。

「サタンが、…神に願って聞き入れられた」という言葉が、そのことを示しています。

わたしたちはこれを、神さまがわたしたちをつまずかせてやろうとか、苦しめてやろうと考えて、そういうことを許しておられる、などと考えるはなりません。

このことは、サタンがどんなにわたしたちに力を振るったとしても、決して神さまに対抗できるような存在ではないこと。本当に見えるものも、見えないものも、わたしたちのすべてを支配しておられるのは、神さまただお一人である、ということ語っているのです。

<不合格のペトロ、弟子たち、わたしたち>

さて、結論から言うと、このサタンのふるいにかけて、信仰が本物だと証明された弟子は誰一人いませんでした。弟子として合格したものは、誰もいなかったのです。

それは、一番弟子と言われるペトロでさえ、例外ではありませんでした。

ペトロは、イエスさまから、自分たちが「サタンに小麦のようにふるいにかけて」と聞いて、すぐにこう反論しました。34節「するとシモンは、『主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております』と言った。」

ペトロは、イエスさまを裏切ることなど、まったく考えていませんでした。むしろ、覚悟が出来ていたのです。イエスさまに従って、牢に入ろうとも、死ななければならないとしても、最後まで、命尽きるまで、イエスさまと一緒にいます、と。

そんなペトロですから、「シモン、シモン」と自分が名指しされて、サタンのふるいにか

けられると言われた。しかもその後イエスさまは、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」と言われた。それはとても悲しく、またショックなことであったに違いありません。

イエスさまは、わたしの信仰が無くなると思っておられるのですか。サタンのふるいに、このわたしが耐えられないというのですか。決してそんなことはありません。わたしを信じて下さい。必ずあなたに最後まで、死に至るまで、従いぬく覚悟があるのです。このわたしの強い決心を、疑っておられるのですか、と。

おそらくこの時の、ペトロの覚悟、決意は、心の底からの、本当の思いだったに違いありません。

しかし実は、ペトロが信じていたのは、自分は従い抜くことができる、という自分の力であり、自分の信念、自分の覚悟を、確かなものとして信じていたのです。イエスさまの弟子として、自分が最後までイエスさまを信じ抜いて、最後までイエスさまに従い抜くこと。これぞ、自分の「信仰」だ、と信じていたのです。

しかしそれは、本物ではなく、偽物の信仰でした。ですから、そんなペトロの偽物の信仰は、簡単に吹き飛んで、あっさり無くなってしまうのです。

イエスさまは、そのことを見抜いておられました。ですから、34 節のように予告をなさったのです。「イエスは言われた。『ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。』」

今日、です。ペトロが覚悟を口にした、その数時間後に、あなたは三度わたしを知らないと言う。「三度」というのは、重ねて何度も、という意味で、徹底的にイエスさまとの関係を否定する、イエスさまと自分は無関係だと強く主張する、ということです。

そして実際、ペトロはイエスさまが仰った通りになったのです。

…わたしたちもまた、「信仰」というものを、自分が信じる意志のことだとか、その信じる思いの強さ、のように考えていることがあるかも知れません。

「わたしは強い信仰を持っている」なんて、この時のペトロのように自信をもって言う人はあまりいないと思いますが、日々が穏やかで、困ったこともなく、平安な毎日が続いている時は、わたしたちは神さまを見上げて、感謝して、祈って、自分の信仰生活に満足している、順調な信仰生活を送っている、と感じているかも知れません。

しかし一度、苦しみ、悲しみ、困難が襲ってくると、わたしたちは祈ることをやめてしまう。神さまなどいないのではないかと疑ってしまう。自分は救われないのではないか思ってしまう。そして、「わたしの信仰は何て弱いんだ」と、落ち込んだりするのです。自分は信仰を失うかも知れない、最後まで信じ抜くことが出来ないかも知れない、と不安になったりするのです。

自分の信仰に、自信があるのも、ないのも、それは信仰が自分の力によるものだと思っている証拠です。

試練の時とは、ここで、まさにふるいにかけて、信仰が偽物であると明らかになる時です。自分の誤った思いが打ち砕かれる時です。

信仰は、わたしたちが自分の思いで、自分の心で、自分の力で、強めたり、守ったり出来るものではないのです。信仰は、自分が神さまを信じる思いの強さのことではないのです。

<イエスさまの祈り>

このように自分の信仰の在り方が問われる時、試される時、ペトロがそうであったように、わたしたちは、イエスさまのこの御言葉を聞くことになります。

「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。」

どうしようもない罪に捕らわれたわたしたちを、自分の心の思いさえままならないわたしたちを、救い出して下さるのは、信仰を守って下さるのは、イエスさまなのです。

わたしたちは、イエスさまに頼るしかないので。イエスさまに、自分自身をお委ねするしかないので。その神さまの御手によって、守り、支え、導いていただくしかないので。

でも、どうしてわたしたちは、このイエスさまを信じる事が出来るのでしょうか。どうしてこのイエスというお方が、自分の人生を、命を、存在を、委ねるに足るお方であると、確信することが出来るのでしょうか。

それはイエスさまが、わたしたちのためにご自分の命を与えても良いほどに愛して下さるということ。ご自分の死に至るまでも、わたしたちを愛し抜いて下さるということ。その十字架の死において、示して下さいましたからです。

わたしたちがイエスさまを信じる、信頼する、すべてを委ねる、ということは、このイエスさまというお方が、どのようなお方であるか、どなたであるか、ということにかかっています。

そして、そのことは、イエスさまの十字架の死と復活の出来事において示されたのです。

十字架と復活は、この方が神の御子であること。わたしたちの罪を赦す救い主であること。ご自分の命を与えるほどに、わたしたちを愛して下さる方であることを示しています。

十字架と復活によって、これらのことが、真であると、真実であると、示されたのです。

このイエスさまの真実は、決して変わることはありません。

わたしたちの心が変わっても、どんなに神さまから離れても、罪を犯しても、裏切っても、イエスさまを知らないと言っても、イエスさまの方は、決して変わらないのです。変わらず、わたしたちを愛して下さいます。赦して下さいます。生かして下さいます。

だから、イエスさまは、わたしのために、祈って下さいます。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。」わたしはあなたのために、十字架に架かろう。あなた

の罪が赦されるために。あなたが滅びないために。あなたが神を信じる者となるために。だからあなたは大丈夫だ。このわたしが、あなたのために祈ったからだ。

…このイエスさまに、わたしのすべてがかかっているのです。この祈りに、このお方に、わたしのすべてが支えられているのです。そのことを信じて、受け入れること。依り頼むこと。それが、本物の信仰なのです。

イエスさまは、この祈りの後に、ペトロのこのように言うておられました。「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

イエスさまは、ペトロの偽物の信仰が粉々に砕け散ると予告されたその後に、あなたは立ち直る。そして、兄弟たちを力づけるのだ、と語って下さいました。

イエスさまは、ペトロが本物の信仰を得て、つまり、イエスさまの祈りによって支えられることによって、罪を赦され、弱さの中から立ち上がり、さらに兄弟たちの力になることが出来ると、ペトロが将来、恵みに生きるようになる姿まで、見つめておられるのです。

この最後の晩餐の主の食卓で、罪を赦すことが出来るお方である、イエスさまただお一人だけが、罪を赦されて歩んで行くペトロの姿を、すでに見つめておられます。

わたしたちも、このイエスさまの祈りの中にあり、わたしたちも、このイエスさまの赦しの眼差しの中に置かれています。

目の前の現実にあって、わたしたちは弱くなったり、また罪を犯したり、神さまを疑ったりしてしまうようなことが起こるかも知れません。しかしそれは、自分の信仰が、自分の力に頼るものになっていないか。本当にイエスさまの罪の赦しを受け取っているか。神さまの愛に立っているか。そのことを吟味させられる時となるのです。

そしてその度に、わたしたちは、自分がどんなに揺らいでも、移ろっても、弱っても、倒れても、イエスさまが現わして下さった神さまの真実だけは、決して変わらないということ。わたしたちが、イエスさまの祈りの中で、愛の眼差しの中で、ひたすらに支えられているということを、繰り返し覚えさせられるのです。イエスさまの十字架に示された罪の赦しに、神さまの愛に、繰り返し立ち帰らされるのです。

その時、試練はわたしたちにとって、まことの信仰へと導き、成長を与えられ、恵みを知る時とされていきます。

ペトロが兄弟を力づけることが出来るようになったのは、すべてが成し遂げられた後に、このイエスさまの祈りを思い起こし、自分の罪を赦し、慰め、立ち上がらせて下さったイエスさまが、まことに真実な方であるということ、確信できたからに他なりません。

わたしたちもまた、イエスさまの祈りに支えられて、罪を赦され、立ち上がらされた時に、信仰が強められ、励まされ、ますますイエスさまに寄り頼む者として成長していくことが出来ます。そして、イエスさまがそのように祈り、慰め、支えて下さる方であることを、兄弟姉妹に確信をもって語っていくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

今日から受難週が始まります。わたしたちの罪を赦すために、苦しみの十字架を担われた御子イエスさまの一足一足を覚えさせて下さい。

わたしたちの救いは、すべてイエスさまに掛かっています。わたしたちの信仰は、ただイエスさまにのみあります。どうか、わたしたちがどのような試練にありましても、イエスさまがわたしたちのために祈って下さり、イエスさまがわたしたちを支え、守って下さることを、確かに信じる者とならせて下さい。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン